

(様式5)

8 学校アクションプラン

平成29年度 富山中部高等学校アクションプラン - 1 -		
重点項目	学力の向上	
重点課題	①授業の水準を高める。 ②生徒がテスト等によって学力を自己分析し、主体的に学習を進めることができるよう指導する。	
現状	①授業力の向上を目指して互見授業等を行い、教科別授業研究会の充実に努めている。 ②課題をこなすことに終始し、テストによる学力分析と事後対策が不十分な生徒が多い。	
達成目標	①互見授業を行い、授業力の向上を図るための教科別授業研究会の実施回数 各教科年間2回以上	②各種テストの見直しを行い、その後の学習計画を自主的に作成・修正し、実践できた生徒の割合 80%以上
方策	○互見授業を全教員に対し公開する。 ○互見授業終了後、教科別授業研究会を開催し、3年間を見通した指導法を築き、指導目標を共有する。 ○定期的に生徒の学力や学習実態を分析し、授業方法の改善をはかる。	○読解力・思考力・判断力・表現力等を育むような質の高いテスト作りに努める。 ○校内模試においてテスト解説授業を実施し、テストを見直す意識を高めるとともに、その後の学習の指針を示す。 ○テストの見直しにより、学習活動におけるPDCAサイクルの徹底を図る。
達成度	○各教科年間2回以上を実施した。	○テストを見直す意識が「強くなった」または「強くなった教科もある」と答えた生徒85% ○テストでできなかった分野の復習を学習計画に取り入れ実践しようとしている生徒70%
具体的な取組状況	<p>《互見授業》 1、2学期に各教科で互見授業を実施した。授業実施後には教科別授業研究会を持ち、授業力向上に向けた指導法の検討を行った。多くの教員が、自分の専門教科以外の授業を積極的に見学し、発表者に感想を伝えると共に、自分の指導の参考にした。</p> <p>《テストの見直し、自主的な学習計画》 1年 ・定期考査や実力テストの問題を冊子にして、冬季休業中の課題とした。(数学) ・定期考査CGの問題を、土曜授業の小テストの範囲とし、見直しを徹底した。(英語) ・定期考査後の授業や解答欄に、出題の意図や解法のポイントを詳細に伝えた。(国語) 2年 ・自主的、自発的な学習を促すため、長期休業中の課題は各教科が課す「必修課題」と自分の現在の状況、進路志望などを鑑みて選択する「選択必修課題」を設定した。おおよその学習量が「必修課題」:「選択必修課題」=1:2となるように「必修課題」の量を調整した。 3年 ・各進学模試終了後、『模試解説授業』を2～3時間行い、テストの見直しを図った。進学模試や定期考査において各教科で解説・講評を配布し、深い学びを行うよう指導した。 ・1学期末考査終了後、大学別に学習ガイダンスを行い、効果的な指導を図った。難関大講座等の特別講座で学習支援を行った。</p>	
評価	A	<p>《互見授業》 各教科において2回以上の互見授業と教科別協議会が実施され、その概要が報告されており、生徒の主体的、対話的な深い学びを意識した授業方法の改善が検討されている。</p>
	B	<p>《テストの見直し、自主的な学習計画》 1年 ・テスト後の見直しをしている教科は、特に数学(約55%)で高かった。できなかった分野を自主学習に取り入れている教科は、数学・英語で高かった。見直しができなかった理由として、次の課題や予習に時間をとられ十分に時間がとれないと感じている。 2年 ・前年度より、テストを見直す意識が「どの教科も強くなっている」35%、「強くなっている教科もある」54%と9月よりも数値が上昇している。地歴・公民、理科の見直しをする割合が上昇し、3教科中心の学習から5教科型の学習に転換していることが伺える。 ・「実力テスト後の解説授業」について、51%が「すぐくためになっている」、40%が「少しためになっている」と答えており、前述の数値の上昇、生徒の意識の改善に解説授業が端緒となったと思われる。 3年 ・「テストを見直す意識が強くなった」生徒の割合は90%(昨年度86%)、「進学模試後の解説授業がためになっている」生徒の割合は92%(同85%)であった。見直ししたり、その後の学習に取り入れている教科は理数系教科が多い。テストの見直しによって学習活動におけるPDCAサイクルが確立しつつある。</p>
学校評議員の意見	<p>《互見授業》 ・他者の取り組みをベンチマークすることは学びと気づきにつながると同時に、他者からのフィードバックは自らの成長につながる。</p> <p>《テストの見直し、自主的な学習計画》 ・テストで解けなかった問題が、見直しにより解けるようになることは、以後の自信につながる。</p>	
次年度へ向けての課題	<p>《互見授業》 ・新カリキュラム導入にむけて、生徒の思考力、判断力、表現力を育てるための授業改善を続けていかねばならない。知識偏重にならないよう、アクティブラーニングの手法を取り入れるなど生徒が主体的に授業に参加できる工夫をさらにすすめる。</p> <p>《テストの見直し、自主的な学習計画》 ・生徒にテストの見直しを行なわせるには「週末課題として課す」「解説授業を行う」などの外発的な動機づけも必要である。生徒に自主的に学習計画を立てさせるために、担任や教科担当者が、各々抱えている課題を分析し、長期的な見直しを持って、段階毎に具体的なアドバイスを与えていく。</p>	

評価基準 A達成した Bほぼ達成した C現状維持 D現状より悪くなった

重点項目	進路意識の高揚と進路希望の実現	
重点課題	①自己の将来像に連なる進路意識を醸成し、進路希望の実現をはかる。 ②より難関を目指す進学意識を育成する。	
現状	①全員が大学への進学を希望している。 ①大学などと連携した探究的な学習活動・体験の機会を活用する工夫が必要である。 ②自分の夢や希望を具現化するために、意欲的に情報を収集し活用する姿勢に欠け、進路選択が遅れる生徒が増加傾向にある。	
達成目標	① 大学探訪・進路講演会に満足した生徒の割合 大学探訪 … 90%以上 進路講演会 … 80%以上	②希望する進路の実現を果たした生徒の割合 第1志望大学の合格率 … 50%以上
	<p>方策</p> <p>○将来の社会的・職業的自立に向けた一人一人のキャリア発達を促すために1学年の生徒に対し進路講演会を行う。希望の多い分野から講師を招き、10分野以上の分科会を設置し実施する。講師は生徒にとって身近な存在として、本校卒業生を主に依頼する。</p> <p>○大学受験と大学生活を具体的にイメージさせるために本校卒業生を招き、大学生に学ぶ会を2学年で行う。</p> <p>○面接指導や学年集会、および進路に関する行事を通して、早い時期から高い進路意識を持たせるよう指導する。また3学年では個別指導を特に強化し、生徒一人一人が志望大学の要求する学力に到達するように努める。</p> <p>○SSH等を通し探究的な学習活動・体験の機会を増やし、大学で何をするかについて具体的なイメージを抱かせる。</p>	
達成度	・大学探訪 93% ・進路講演会 93%	・第1志望校の合格率 28%
具体的な取組状況	1年 ・2年生と合同で、社会の様々な分野で活躍されている方々を招いて、進路講演会を実施した。事前アンケートを参考に法律、行政、経済、心理学、マスコミ、教育、理工、医学、看護学、薬学等の分野から15分科会を設定し、生徒は希望する2分野の講演を聴いた。	
	2年 ・東京方面の大学探訪を実施した。東京大学のオープンキャンパスに合わせ、8月2日～3日の1泊2日で実施し、197名が参加した。お茶の水女子大学、一橋大学の見学、法務省・日本銀行・パナソニックなどの企業・省庁訪問、宿泊先でのOB・OGとの懇談会を実施した。 ・夏期休業期間を利用して、東京大学・富山大学で実習実験を行ったり、米国研修を実施するなど進路意識の高揚を図った。	
	3年 ・2年次の目標『夢に向かって努力する生徒の育成』を継続し、生徒には『夢を目指し、日本一学習しよう』と日々呼びかけた。 ・7月には大学別の学習ガイダンスを実施し、夏季休業中に取り組んでほしいものやそれぞれの大学合格までの学習プランを紹介し、個人面接を通じてどのように学習するか担任と計画を立てた。 ・進学模試や定期考査を通じて、PDC Aサイクルでの学習を指導している。 ・11月まで各学習段階に応じた特別講座を開講し、学力の伸長を図るとともに目指す基準を示した。	
評価	A	<p>《大学探訪》</p> <ul style="list-style-type: none"> 大学探訪のメニューの中ではOB・OGと語る会、企業訪問では単に企業の説明をするだけでなく、現在の学びが将来にいかにつながってくるかまで説明をしてくれた企業の満足度が高かった。 大学探訪で訪れた大学を志望する生徒が増え、学習量の増加と学習内容の深化が見られるなど進路意識の高揚に有意義である。 <p>《進路講演会》</p> <ul style="list-style-type: none"> 1・2年生合同で10月上旬に開催した。2年生ではキャリアガイダンスの意味合いがもたらされ、職業に対する視野を広めるとともに進路意識を高めることができた。1年生では将来を見据えた適切な文理選択につながることも、目標・進路が明確になり、学習意欲が向上した。
	C	<p>《進路の実現》</p> <ul style="list-style-type: none"> センター試験前に調査した第1志望大学に合格した生徒の割合は目標の50%には届かなかった。生徒は「第1志望をあきらめない」という精神のもと、高い志望を持ち続けている。
学校評議の意見	《大学探訪・進路講演会》 ・旅行感覚が強くなるように、内容の評価も必要。目標を定めるに当たり、現地現物は大切なこと。先輩の言葉からは啓発されることが多い。	
	《進路の実現》 ・目的・目標が明確になると人は内発的に動機づけられる。学びを通して自分を成長させ、日本を担い立ってほしい。少しでも多くのことを、より高いレベルで学んでほしい。	
次年度へ向けての課題	《大学探訪》 ・理系の生徒には大学探訪実施前に3日間の東京大学実習が準備されており、この実習に参加した生徒のほとんどは大学探訪には参加しない。文系の生徒にも同様のプログラムが新たに準備されるようであれば、東京大学オープンキャンパス、東京方面の大学見学についてはすべて個人参加にするなど、大幅な内容の見直しが可能となる。	
	《進路講演会》 ・実施時期と形式は適切であった。講師も本校生徒の将来を真剣に考えてくれる素晴らしい方々であったが、時間に余裕があれば初めての方だけでも教員側との摺り合わせができればさらによかった。	
	《進路の実現》 ・授業内容や方法、課題の精選、自学用教材の工夫、校内模試のあり方を再検討するなど、大学受験に対応できる学力を段階的に身につけていく指導をさらに研究する必要がある。 ・個々の生徒とのコミュニケーションを大切にし、添削指導や面談のスキルを上げるなど、個別指導の充実をより一層図る必要がある。	

評価基準 A達成した Bほぼ達成した C現状維持 D現状より悪くなった

重点項目	読書指導・体力の向上	
重点課題	①読書指導を充実し、図書館利用の広報周知を行う。 ②体力の向上に努めさせる。	
現状	①生徒には、読書を通じて自らの生き方や社会のあり方などを思索する時間が必要であるが、学校生活が多忙化し、なかなか読書の時間が取れていない状態である。 ②体力の低下が危惧される生徒が増えてきている。	
達成目標	①生徒への読書、図書館利用を促す広報刊行物の年間配布回数及び読書の時間の数	②2年次において、持久走の自己最高記録を更新した生徒の割合
	広報活動10回以上、 読書の時間年間15時間以上（1・2年）	70%以上
方策	○図書広報刊行物を月一回以上発行する。 ○読書の時間を計画的に確保する。また、年2回「読書会」を行う。 ○読書教養講座の実施や「本の虫」などの発行を通して図書委員による主体的な活動を行い、図書館への理解を深めさせる。	○全学年、体育の授業時に、毎時10分間程度のサーキットトレーニングを実施する。 ○前年度の自己記録を参考に今年度の自己目標を明確にし、体育の授業や部活動などで意欲的なトレーニングに結びつける。
達成度	広報活動30回以上 読書の時間 1学年 14時間 2学年 18時間	83.3%
具体的な取組状況	《読書・広報活動》 ・新入生に対して入学直後のLHの時間を利用して図書館オリエンテーションを実施した。 ・図書委員作成の「図書案内」を年12回発行し教室に掲示した。司書作成の「新着図書案内」を月2～3回、職員室前と図書館前に掲示した。 ・1年と2年の教室前廊下に「ミニ図書館」としてマガジンラックを置き、新着図書を紹介した。 ・図書アンケート結果と書籍を紹介する特集冊子「本の虫」を11月に全生徒に配付した。 ・図書委員会の活動や感想文・感想画の優秀作品を紹介する図書館誌「富山中部図書館」を3学期に発行し、全生徒に配付する予定である。	
	《読書・読書運動》 ・LHの中に読書の時間を設定し、担任と生徒が同じ本と一緒に読む活動を行っている。 ・8月と12月に、1年は読書会、2年はビブリオバトルと意見文作成を行った。そのまとめを図書館誌で紹介する予定である。 ・1学期に外部講師を招いて教養講座を実施した。本の先見性や醍醐味を話していただくことで読書意識の高揚を図った。 ・文化祭で、読書の時間に読んだ本のコメントの掲示（1年）やビブリオバトルの決勝戦（2年）を行い、図書活動の活性化を図った。	
	《体力の向上》 ・サーキットトレーニングの意義について理解させトレーニング効果が上がるように実施した。	
評価	B	《読書指導》 ・3学期に進路の行事が急遽入り、1年の読書時間が14時間になった。 ・全教職員の共通理解および図書委員の主体的な活動で、充実した図書活動を実施することができた。図書館利用者・本の貸し出し数は昨年に引き続き多い。 ・読書の時間 生徒の取り組みが、本によって異なる。読破する生徒の割合が低い場合がある。
	A	《体力の向上》 ・継続して行ってきたことで、トレーニング効果が上がっていることを自覚することができ意欲的に取り組むことができた。
学校評議員の意見	《広報活動・読書運動》 ・科学的な読み物、論理的に書かれているものは文系であっても必要である。	
	《体力の向上》 ・体力はもちろんだが、日常生活（睡眠時間、食事等）も大切である。	
次年度に向けての課題	《広報活動・読書運動》 ・新校舎は図書館棟と教室棟が離れているため、生徒が図書館棟に足を運び、手軽に本を手にとってくれるような工夫を続けていく必要がある。 ・読書の時間の本の選定は、「知識・教養を高める」「読み切ったという達成感を感じさせる」といった目的および読む時期・冊数など、いろいろなことを考慮して行わなければならない。	
	《体力の向上》 ・自己の体力、課題を把握し、積極的に取り組む姿勢の育成をはかる。 ・各自の体力に応じて、運動負荷の強度を設定する。	

評価基準 A達成した Bほぼ達成した C現状維持 D現状より悪くなった

重点項目	学校行事・部活動の充実	
重点課題	①体育大会をより充実させる。 ②部活動を充実させる。	
現状	①体育大会へのあこがれが、本校への志望理由の一つになるなど、体育大会は、本校最大の行事として知られている。また、体育大会を通じて、生徒たちは人間的にも大きく成長している。 ②全校生徒に対し、いずれかの部に所属するよう勧めている。生徒は、学習と部活動を両立させるために、懸命に取り組んでいる。	
達成目標	①体育大会に充実感を持つ生徒の割合 *大会終了後に実施する、生徒会によるアンケート 80%以上	②部活動に充実感を得た生徒の割合 *3年生全員を対象にした、8月下旬のアンケート 70%以上
	○体育大会の競技や応援の仕方について、生徒会を中心に改善を常にはかる。 ○競技の練習や準備活動が行き過ぎないように、適切な指導を行う。	○部活動への参加を積極的に促す。 ○限られた時間の中での、効率的な練習や活動を普段から考えさせる。 ○個々の生徒が、学習と部活動のバランスが取れるよう、ホーム担任と部顧問が連携を取って指導する。
達成度	95.9%	97.1% ※アンケートは9月中旬に実施
具体的な取組状況	《体育大会》 ・生徒会執行部員、各団の団役員生徒、教員との間で意見交換を積極的に行い、生徒主体の大会運営に努めた。 ・大会当日の天候やグラウンド状態を考慮し、生徒の安全に配慮して一部競技を取りやめた。	
	《部活動》 ・放課後の下校指導、昼休みの部室前の清掃指導を実施した。	
評価	A	《体育大会》 ・悪天候の中で実施したが、多くの生徒が満足感を得ていた。
	A	《部活動》 ・適切に休養日を設定し、学習と部活動の両立を考えながら部活動を行った。
学校評議員の意見	《体育大会》 ・チームワーク、リーダーシップとは何か、多くの学びのある貴重な機会である。人間を育てるという意味を持っている。	
	《部活動》 ・時間を有効に使い、集中力を高める場として部活動の時間を重視してほしい。先生方の休息も必要。	
次年度への課題	《体育大会》 ・生徒の安全・健康面に配慮し、全体練習の日数や活動時間の短縮などを検討する。	
	《部活動》 ・部活動をとおして生徒が人間的に成長することを期待し、活動時間の徹底、部室前・部室内の清掃指導をより徹底して行う。	

評価基準 A達成した Bほぼ達成した C現状維持 D現状より悪くなった

重点項目	「探究力」・「科学的思考力」の育成、「自己発信力」の育成	
重点課題	①SSH事業を計画的に運営・実施する。 ②海外研修により国際・学術交流を深める。	
現状	①これまで、探究科学科を中心に、野外実習や課題研究などのさまざまな探究活動を通して、生徒の学問的な探究心の向上をはかってきた。本校がスーパーサイエンスハイスクールに指定されたことによって、これまでの探究活動の継続・発展とともに、理数科学科に一層の重点を置いた計画を立て「探究力」・「科学的思考力」の育成に効果的な指導法、評価法を開発する。 ②語学研修を中心に留学生との交流や先端技術見学等を行うアメリカ研修、SSH事業として平成27年度から実施しているオーストラリア研修を通して、英語力を身につけ英語で自分の考えや意見を伝えたり、相互に課題研究の成果を英語で発表しあう経験等を積み重ねることで、将来にわたりグローバル社会で活躍できる「自己発信力」を身につけた人材の育成を目指す。	
達成目標	①-1 野外実習、大学実習に対するそれぞれの目標達成度 *各実習ならびに後に実施するアンケート ①-2 課題研究のルーブリックによる評価	②-1 アメリカ研修参加生徒に対し研修前後に実施するCASECテストの結果の比較 ②-2 東北育才学校との交流、オーストラリア研修に参加した生徒の充実感および保護者の肯定感の割合
	①-1 各90%以上 ①-2 平均がレベル3に到達した生徒の割合 80%以上	②-1 研修後のCASECテストで、20点以上伸びた生徒の割合 70%以上 ②-2 参加生徒の充実感 各90%以上 保護者の肯定感 各80%以上
方策	○野外実習や大学実習については、実習の内容や方法について十分に打合せを行ない、生徒が興味関心を抱き、積極的に参加できるよう工夫する。 ○探究活動（課題研究）を発展探究、共働、発表の3種類ルーブリックを用いて評価し、伸びをはかる。大学との連携をはかり、探究活動が充実した内容となるよう工夫する。	○アメリカ研修では、研修後に再度CASECテストを実施して英語力の伸びを測る。さらに、身につけた英語力を生かして積極的に自分の意見や考えを発信できる力を育てよう研修内容を工夫する。 ○オーストラリア研修では、事前研修を効果的に組み立て、相互交流の中で英語で課題研究を発表したり積極的に意見交換を行う等、自己発信力を育成できる研修になるよう工夫する。
達成度	①-1 野外実習…91%積極的に取り組めた 96%観察力が向上した 大学実習…96%満足できた ①-2 2月の最終評価でルーブリック評価の平均がレベル3に到達した生徒の割合…74%	②-1 研修後のCASECテストで、20点以上伸びた生徒の割合…40% ②-2 東北育才学校…今年度は交流なし オーストラリア研修…3月に実施
具体的な取組状況	<p>《SSH事業》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・野外実習では、観察力と課題設定力の向上を最大の目標として実施した。立山実習では事後指導を1日設定し、観察結果のまとめをさせた。臨海実習は2泊3日でゆとりある研修を実施した。文化祭において各班のポスター発表と代表班の口頭発表（スライド使用）を行った。 ・大学実習には、2年普通科の希望者も含めて50名（東大30名、富大薬学部20名）が参加し、各講座に分かれてそれぞれ3日間で実施した。その成果を文化祭においてポスター発表した。 ・2年探究科学科の課題研究では、富山大学の指導教官13名に指導を受けた。5月と11月に各ゼミの研究内容についての指導、1月の発表会では発表についての評価をしていただいた。 ・探究活動の評価に当たっては、生徒によるセルフアセスメント、教員によるルーブリックを用いた評価、さらに生徒との面接の実施や「探究ノート」の評価を取り入れ、適正かつ客観的な評価を心がけた。ルーブリックは、探究活動・協働・発表会の3種類を行い、その結果を面接などで伝え、生徒自身が次の目標を持てるようにした。 <p>《海外研修》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アメリカ研修は、ボストンのタフツ大学の学生寮に滞在しながら語学研修を行った。さらに最先端の科学技術にも触れ、世界各国からの留学生との交流も深めた。参加生徒は、自分自身や日本を見直すよい機会になると同時に、自己発信力を身につけることの重要性も自覚していた。 ・オーストラリア研修は、16名の生徒が3月3日から11日まで、ニューサウスウェールズ州コフスハーバーのセントジョン・ポール・カレッジを訪問する予定である。ホストファミリーとの交流を深めるとともに、課題研究発表や科学的研修などを計画している。事前研修として、受け入れ生徒とのスカイプによる交流なども行っている。 	
評価	B	《SSH事業》 ・野外実習のアンケートで「観察力が向上した」と答えた生徒が、臨海実習で97%、立山実習で95%だった。立山は雨の中での活動だったが、積極的に取り組んでくれた。 ・課題研究のルーブリック評価では、レベル3に到達した生徒の割合は74%で目標値には届かなかった。
	C	《海外研修》 ・アメリカ研修後のCASECテストで20点以上伸びた生徒の割合は40%であり、全体平均では3.5点のアップにとどまった。ただ数値以上に生徒の満足度・充実度は高く、意義ある研修となったようだ。 ・オーストラリア研修には定員の3倍以上の申し込みがあり、生徒・保護者ともに非常に期待度が高まっている。
学校評議員の意見	<p>《SSH事業》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中学生や保護者が憧れるような取り組みや情報発信を続けてほしい。「探究力」が「人間力」へと進化していくことがリーダー育成につながる。 <p>《海外研修》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・若いときの海外経験は何物にも代えがたい財産である。国際化時代に対応できる人材の育成をお願いしたい。海外旅行ということで終わらせないように。 	
次年度へ向けての課題	<p>《SSH事業》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1年次のSS基幹探究では「探究モジュール」を取り入れ、しっかりと基礎作りに取り組んでいる。2年次には大学の教官の指導も受け、本格的な探究活動を行い、3年次の発展探究βで英語での発信につなげている。3年間を見越し、一貫性ある効果的な指導体制や評価法について、さらに検討する必要がある。 ・ルーブリックの評価態勢が整いつつあるが、客観的な評価確立のためには教員研修をさらに充実させることが求められる。 <p>《海外研修》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実践的なプログラムを通して、英語によるコミュニケーションへの意欲や技術は高まってはいるが、事前研修の中でいっそうのモチベーションの高揚が必要となる。 ・単なる語学研修ではない、オーストラリア研修の目的や位置づけを明確にすべきである。 ・研修で得た能力や体験を進んで発信し、学校生活や将来に生かす機会が必要である。 	

評価基準 A達成した Bほぼ達成した C現状維持 D現状より悪くなった